# 野地潤家先生著

# 『国語教育原論』

野地潤家先生の『国語教育原論』（共文社B5判・二三八ページ・一四〇〇円）が出版された。

まさに斯界待望の書である。とりわけ、直接・間接先生のお教えを受けている者にはその感が深い。

本書は、うみ疲れた者にはあたたかい愛のふところを、「迷っている人、不安に思っている人、苦しんでいる人」には確かな光明を、「まっしぐらにうちこんでいる」人にはふと省みる機会を与えてくれる。また、形骸化・マンネリ化へのきびしい警鐘となり、傲慢・偏見への鋭いメスともなろう。

国語教育研究・実践に必備の書である。それも書棚にしまっておく書ではない。座右に置いておりおりに読む〝こころの書〟であり、必要に迫られて見る〝生きた辞書〟である。

〝原論〟構築は、先生の研究・実践の起点となっている。「自己の安んじて拠るべきもの、片々たる現象面の研究でない、奥深いものを」という欲求は、わたくしのばあいことに強かった（一三〇ペ）といわれる。「国語教育

〝原論〟の確立を」（Ⅰ五）提唱論述して、つぎのように結ばれる。

「国語科本来の仕事とはなにか。国語学力とはなにか。その発達過程・習得過程は、どのようになっているか。国語科が目ざすべき目的・目標を設定して、それを具現するための内容の組織化を、どうはかっていくべきか。

これらについての根本的な探索を必要とする。それは国語教育〝原論〟と名づけてしかるべきである。〝原論〟は、わが国のばあい手薄であるといってよい。国語教育学の提唱は、戦前（一九三〇年代）にも戦後（一九五〇年代）にもなされたが、その枝葉が茂ってきたわりに、根幹は重厚なものとなっていない。〝原論〟を求め、それを具体化していく仕事がのぞまれる。それは迂路であるかのごとくであって、そうではない。それは国語教育の大道へ通じているのである。」（六四ページ）

〝原論〟確立については、さきに、国語教育学研究」（昭和36年3月）においても、しばしば論及された。本書は、その続編・発展展開編になっていて、以来、昭和四十七年までの十年間に、それぞれ、求めに応じて諸誌に寄せた論考二十一編を、つぎのように三章に編制して成ったものである。おりおりの論考が、十年きざみに、結果として精確な体系を成していることこそ、著者の〝原論をめざす〟姿勢であり、本書の〝原論〟たるゆえんであろうか。

Ⅰ　国語教育の役割と課題（細目次・副題は省略）

一国語科教育研究のために　二国語科教育の役割　三国語教育の課題　四ことば・日本語・国語教育　五国語教育〝原論の確立を

Ⅱ　国語教育の基底と内実

六国語教育と思考力　七国語教育内容の構造化　八国語教育における学習内容の近代化　九国語学力の基準を求めて　一〇言語観をどのようにもつべきか　一一国語科教育の目ざす学力　一二〝創造力〟をめざす国語教育

Ⅲ　国語教育の生成と深化

一三国語教師の条件　一四国語教師の理想像　一五中学校国語科単元論　一六国語教育を求めて　一七国語教育研究の根本と課題　一八国語学習力の育成　一九発動的な学習態度の育成　二〇国語授業力の問題　二一国語科評価の基本問題

Ⅰでは実践・研究上の基本問題がとりあげられ、その理念・方向が、Ⅱでは内容上の基底とその実質を思考力・国語学力・言語観などの視点から明らかにすることから、その構造把握・質的水準の問題が、Ⅲでは生成発展深化伸張のための諸問題をとりあげて、授業創造の問題から教師論・単元論・態度論・学習力・評価の問題などが考究される。

つねに歴史研究・比較研究の視点がはたらく。根底は実践に密着する。思考力と創造力が尊重され、国語愛が至高とされる。用いられる資料（事例）はおびただしい。抽象をめざしながら具体的であり、巨視に向かいつつ微視的である。

現下の国語教育の問題を、根源的・体系的に網羅している。

（南本義一）